小学校教育における言語活動の充実に関する研究

－児童に身に付けさせたい言語に関する能力とそれらを踏まえた指導の工夫－

所属校：西東京市立柳沢小学校
氏　名：浅　　野　　あ い 子
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：言語活動・言語に関する能力・論理的思考・コミュニケーション

Ⅰ　研究の目的

教育の目的は、よりよい社会の担い手としての人格の完成を目指すことである。そのためには、他者とよりよい関係を築き共に生きる資質をはぐくむことが重要である。自己も他者もともに尊重するためには、自分が何を考えどのように感じるかを適切かつ分かりやすく伝えることと、他者や相手の立場を受け止め、考えを理解し、コミュニケーションを図ること、つまり言語を介して他者と協働することが大切なのである。多様な情報を理解し、自分の考えを明確にもち、望ましい人間関係を主体的に築きながら社会に生きるためには、言語に関する能力は不可欠であるといえる。

このことは、学習指導要領改訂の主な改善事項の一つとなり、各教科・領域等にわたって言語活動の充実を図ることの重要性が示された。各学校からは、「PISA型読解力の育成」に向けた研究成果や、国語科教育における指導の改善及び新しい実践が数多く示されてきたが、言語活動自体に重点が置かれていることが多い。また「話す・聞く」「読む・書く」等の言語活動は、各教科等において行われてきたが、児童主体の活動型の授業づくりや学習のねらいを達成するための手段として取り入れられるにとどまっていた。

よりよい社会の担い手としての生きる力をはぐくむためには、言語を用いること自体を目的とせず、言語を用いて自己表現したり相手を理解したりすることを目的とした言語活動が行われなければならない。そのためには、学習のねらいを達成するだけでなく、言語に関する能力を発達段階に応じて着実に身に付けさせることが重要であると考えた。

そこで本研究は、言語活動をとおして身に付けさせたい「言語に関する能力」を踏まえて言語活動を学習過程に位置付けることが重要であるという考えの下、「言語に関する能力」を体系的に明らかにし、言語活動の充実を図るための指導の工夫を提案することを目的とした。

Ⅱ　研究の方法

１　基礎研究：先行研究及び文献の検討と「言語に関する能力及び言語活動例一覧」の作成

２　実践研究：授業実践をとおした指導の工夫の追究、児童の変容の記録及び分析、「言語に関する能力及び言語活動例一覧」活用による教師の意識変容の分析

Ⅲ　研究の結果

１　本研究における言葉の定義

言語活動とは
基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究する際の、言語を用いた活動

言語に関する能力とは
国語科において身に付く力を中心として、
○　論理的に考え表現する基盤となる力
言葉を用いて、的確かつ論理的に思考し表現する知的活動の基盤
○　コミュニケーションの基盤となる力
互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力，我が国の言語文化に触れることではぐくまれる感性や情緒及びそれらの基盤

言語活動の充実をとおして目指す児童像とは
より多様な視点に立って物事を理解し、それについての自分の考えをもち、相手に分かりやすく伝えられる子供

２　「言語に関する能力及び言語活動例一覧」の作成

言語活動を通して身に付く言語に関する能力を体系的に整理し、各教科等にわたり言語活動の充実を図るための視点や言語活動例を示した「言語に関する能力及び言語活動例一覧」（以下「一覧」）を作成した。

３　言語活動の充実を図るための指導の工夫

(1)　言語に関する能力の獲得過程に応じた支援

具体的には、言語に関する能力の獲得過程の各段階(図１)において、①構造化を促す②視点の移動を促す③自己内対話を促す言葉かけや行動化の場面を設定することであるととらえた。

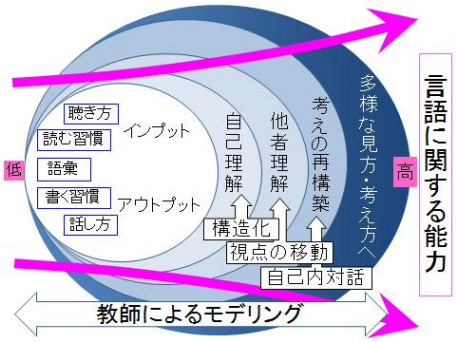

図１　言語に関する能力の獲得過程

①　構造化を促す指導

グループ化、ピラミッド図等による情報の視覚化は、自分の考えを整理したり、相手や他者の考えを理解したりする際の手段である。言語活動において図式化や構造化を促すことは、児童の論理的思考力をはぐくむために有効な手だてであるといえる。

② 視点の移動を促す指導

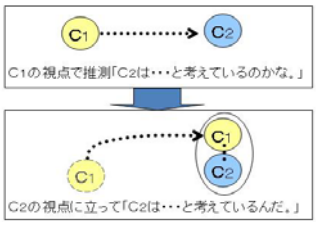

図２　視点の移動

他者を意識するだけでなく、他者側の視点に立って物事をとらえて考える「視点の移動」が重要である。自己の視点から離れ、他者の立場に立って考え理解しようとしたり、他者にとってより分かりやすい伝え方を工夫したりすることを常に意識させ、習慣化を図ることが有効であると考える(図２)。

③ 自己内対話を促す指導

他者の考えを受けての自己内対話をとおして、自己の考えを再構築することが重要である。「自分はどう考えるか」等、問い直しを促したり意識させたりしながら、自己内対話（内化）と発信（外化）を繰り返すことが有効であると考える。

(2) 教師が言語活動のモデルとなること

表１　言語活動のモデルとしての留意点

	論理的思考・表現	コミュニケーション
説明	・「まず」「次に」等、順序や流れを明確にする言葉の活用 ・図や式、箇条書き等の活用	・語りかける口調 ・受け止める姿勢 ・全体への視線 ・反応を見ながら ・速度，発音，声量
日常的な場面	・立場を明確にさせる ・根拠を問う	・相手の言葉を繰り返す ・うなずく，相槌を打つ ・気持ちに寄り添う言葉 ・美しい言葉遣い

児童にとって、もっとも身近な学習モデルは教師である。正しい言葉遣いはもちろん、「論理的に考え表現する基盤としての力」「コミュニケーションの基盤としての力」を教師が十分意識し、児童に身に付けさせたい言語に関する能力を、日常的に体現していくことが重要である（表１)。

(3) 「一覧」を基に教師が自らの指導の在り方を客観的にとらえ、改善を図ること

「一覧」は、児童に身に付けさせたい力とそのための言語活動を設定する際だけでなく、授業改善にも活用することができる。自己の指導が教科及び言語活動のねらいの達成につながったかどうかを、児童の変容を基に振り返り、次の指導に向けて改善の視点と策を見いだす際、「一覧」を活用することで、より客観的な授業の省察が可能になると考える。

Ⅳ　考察

１　児童の変容（第１学年観察対象学級）

４月から学級担任は、児童の気持ちに寄り添った対応や言葉遣いを心がけ、図や様々な方法を用いて考える場面を意図的に設定してきた。また、「一覧」を基に児童の実態を把握し、身に付けさせたい力に応じた言語活動を取り入れ、言語に関する能力の獲得過程に即した支援を繰り返し行った。その結果、集団及び一人一人の実態として、①構造化しながら考えること②事実を整理し、感想と区別して記述すること②言語活動に対する意欲や自信の向上の３点において、プラスの変容が見られた。

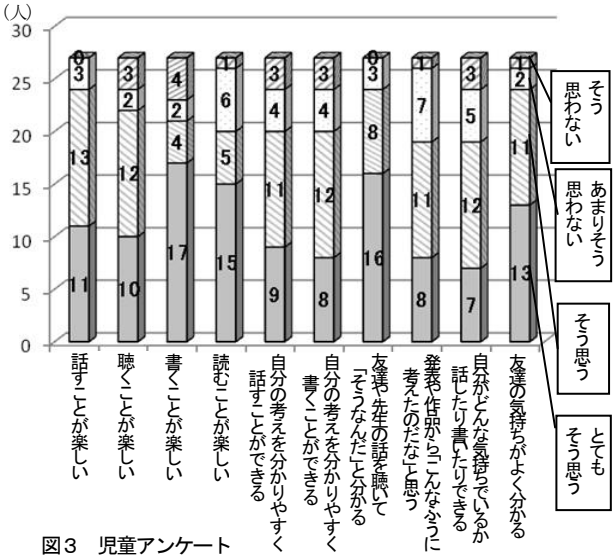

図３　児童アンケート

２　教師の意識の変容

授業改善における「一覧」の活用の有効性を明らかにするため、活用なし（第１段階)、「一覧」を活用した指導計画作成(第２段階)、授業後（第３段階）においてＰＡＣ分析を行った。各段階における結果を比較したところ、段階が進むにつれて視点のカテゴリーが「児童に期待する姿」から「自分自身の指導や支援の在り方」へ移行したことが分かった（図４)。「一覧」の活用が、児童の立場への教師の視点の移動を促し、指導の在り方の改善につながったといえる。

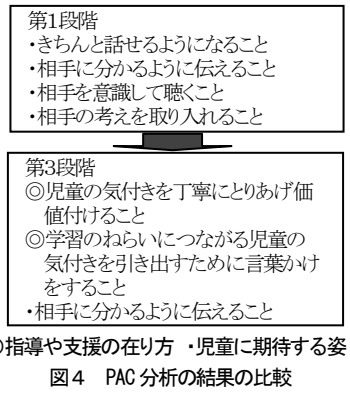

図４　PAC 分析の結果の比較

３　研究の考察

以上の結果から、三つの指導の工夫が、言語活動の充実につながることが明らかになった。

第一に、身に付けさせたい言語に関する能力を明確にした上で言語活動を学習過程に位置付け、能力の獲得過程に応じた支援を行うことは、言語に関する能力や言語活動に対する意欲の向上に有効にはたらく。

第二に、教師が日常的に言語活動のモデルの役割を果たすことは、主体的な学びや言語に関する能力の活用の習慣化につながる。

第三に、「一覧」を活用することで教師が自己の指導を児童の視点から見直し、改善を図ることができる。

今後の主な課題は、「一覧」及び「ハンドブック」の全学年における活用を図り検証を重ねること、指導の工夫をさらに追究することの２点である。